

前回は、「秋の野鳥」と題して野鳥の大移動の様子を紹介しましたが、今回は、「冬の野鳥」と題して、冬の野鳥について近隣の山や川での様子を紹介します。

1 冬鳥の訪れ

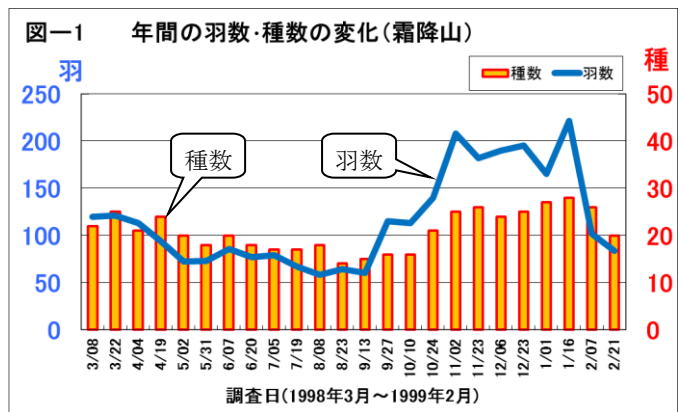
今年は10月15日にジョウビタキが我家の庭にやってきました。例年より1週間ばかり早い到着です。

ツグミは年によって到着の早い遅いが極端ですが、今年は早く11月10日に我家の庭の柿を食べにやってきました。11月に入ると我家から近い厚東川の汽水域にもカモが増え、賑やかになっています。



さて、最初に近くの山の冬季の野鳥の様子を紹介します。

宇部市の霜降山（標高 250m）で1998年3月～1999年2月までの1年間の調査日毎の野鳥の種数と生息数を図1に示します。これは霜降山の麓にある持世寺温泉から山頂までを含む約4.5kmの登山道（両サイド50mの範囲内）に生息する野鳥の種と生息数を調査（ラインセンサス）したものです。



年間を通じてみると、春や夏に比べ、冬季(10月下旬～1月下旬)に種や羽数が多いことが分かります。

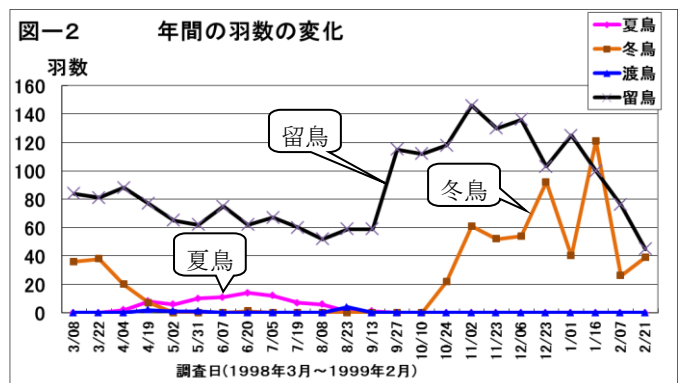
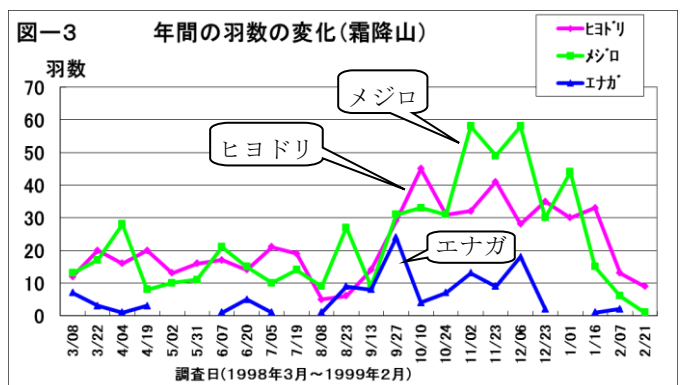


図2は夏鳥、冬鳥、旅鳥、そして留鳥別に羽数の年間変化をグラフにしたものですが、霜降山は、夏鳥に比べ冬鳥の生息が多いことが分かります。また、留鳥も冬の時期に生息が多いことが分かります。

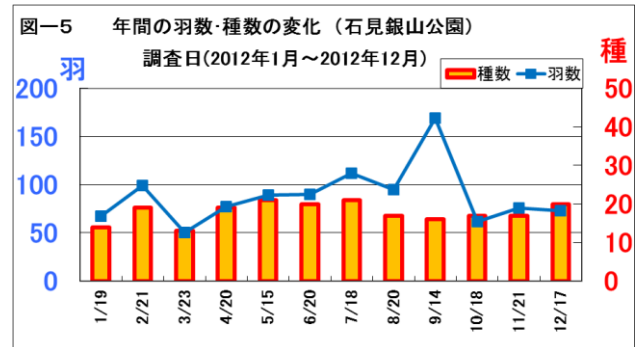
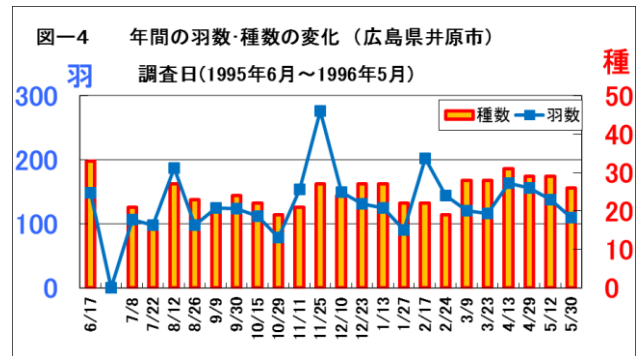
冬鳥が寒さを避けて瀬戸内の宇部にやって来るのは分かりますが、留鳥が冬に増えているのが不思議です。そこで、留鳥で、繁殖期(5月～7月)の生息数と冬季(11月～1月)の生息数を比べ冬季が2倍以上になっている種を抽出すると、ヒヨドリ(2倍)、メジロ(3倍)、エナガ(6倍)の3種でした。その3種の年間の羽数変化を図3に示します。



前回の「秋季の野鳥」でヒヨドリやメジロは寒くなると暖かい九州方面に移動している（漂鳥）と紹介しましたが、南下してきたヒヨドリやメジロが霜降山で冬を越す個体もいることがわかります。霜降山は野鳥にとって厳しい冬を越せる暖かさや餌があるということでしょう。自宅近くの山が厳しい冬に命をつなぐ場所になっていることは嬉しいことです。

## 2 他の地域の冬季の生息状況

近隣の山（山陽小野田市松嶽山、竜王山、江汐湖畔、宇部市小野湖畔、丸山湖畔）の調査では霜降山と同じく冬季に野鳥の生息数が増える傾向がありますが、広島県井原市や島根県石見銀山で調査した箇所では図4・図5のように冬季の増加が見受けられませんでした。冬季に野鳥が増えない理由として、積雪が多いなどが考えられますが両箇所は単年度だけの調査なのではっきりしたことは分かりません。

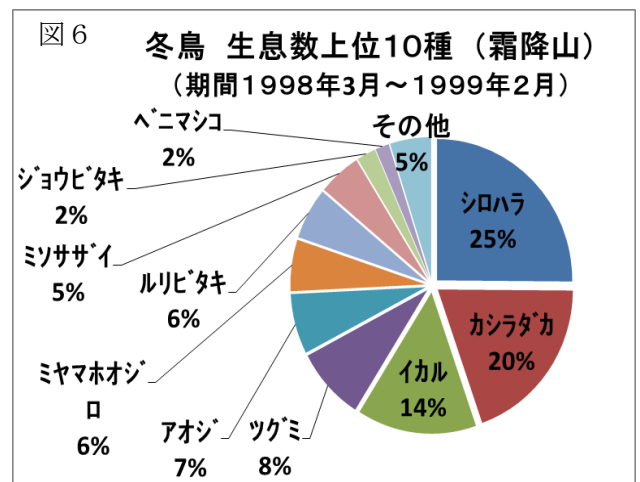


## 3 冬鳥の紹介

さて、冬鳥はどのような種が近くの山々に来ているのでしょうか。図6に1998年の霜降山で確認した冬鳥の上位10種をあげています。種によっては年により霜降山に来る数の多少はありますが、1998年の冬は、シロハラが最も多く、次いでカシラダカ、イカルの順になっています。

冬鳥は、霜降山でどのような生活（行動）をしているのでしょうか。夏鳥は繁殖行動も見られますが、冬鳥はもっぱら採食行動です。

秋にやってきた当時は山の木や草に実がなっていますが、次第に餌となる実も少なくなり、虫も隠れてしまいます。そうすると冬鳥は餌探しに一生懸命です。



ここで私事ですが、元気のあるうちに少しでも高専設立時の趣旨であった地場産業に貢献できたらと JR 貨物会社を早期退職し、見ず知らずの建設会社に就職してその思いの幾何かは果たせたものの、そこに在職中はバブルがはじけた後で公共事業の激減した建設業界は不況の最中、給料は住民税もかからないほどの有様。高邁な思い(?)と差し替えに生活は退職金を取り崩しながらの 10 年間。そして退職した 1 年前からは年金生活になり、ささやかな貯金を引き算しながらの生活状態。そんな状況ですから食べるために一生懸命な冬鳥を身近に感じます。

話は元に戻して、1998 年の調査時に霜降山で冬鳥の羽数が 1 位のシロハラと 4 位のツグミの行動を紹介します。以前、野鳥誌に投稿したものを抜粋しています。

.....

#### 4 霜降山の野鳥 「シロハラとツグミ」

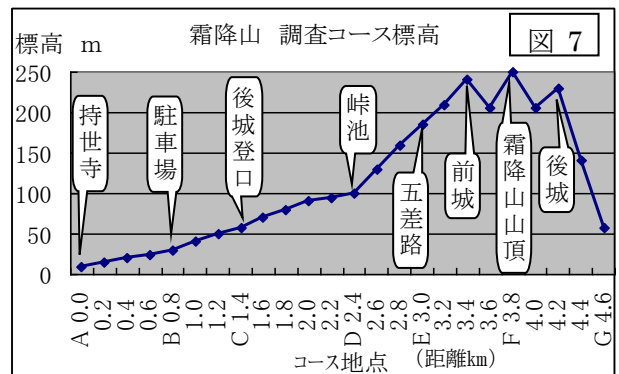
霜降山は秋に冬鳥がやって来る頃、山頂近くに「物の怪」<sup>ものけ</sup>が出ます。林の枝葉の裏々から「クッ」「クッ」「クッ」とざわめきの様な声が聞こえてきます。声の主は姿を見せず、時折「バサバサ」と羽音を発して枝葉の裏を飛びかい、その辺りが「物の怪」のような雰囲気です。

物の怪の正体は「シロハラ」です。毎年、このような雰囲気で霜降山に現れます。今回は同じツグミ科で冬鳥として霜降山にやって来る「シロハラ」と「ツグミ」の様子を紹介します。

##### (1) 最初に、霜降山の調査コースについて

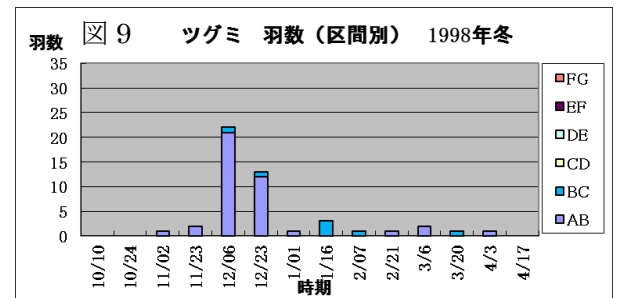
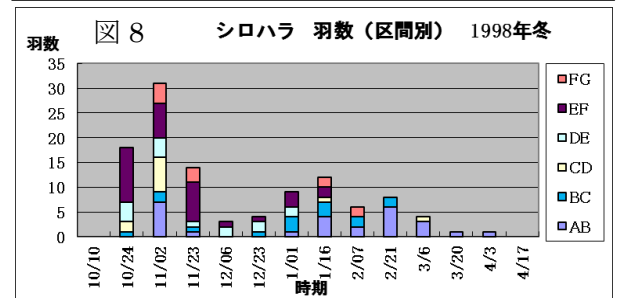
調査コース(図 7)は、持世寺入口から持世寺川沿いになだらかな勾配の里道が峠池まで続きます。峠池キャンプ場からは急勾配となり、五差路経由の前城、霜降山山頂、そして後城の北側の急斜面を持世寺川まで一気に下ります。

調査コースは全長 4600m でコースを AB~FG の 6 区間に分け、その区間の野鳥の種や羽数などを調べます。



##### (2) シロハラとツグミの生息数

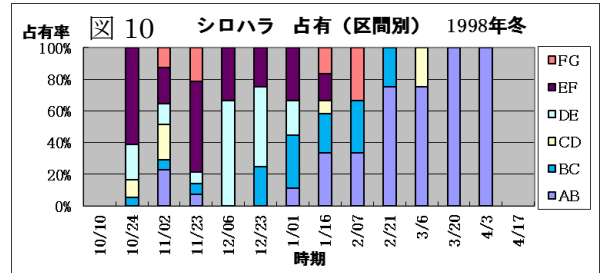
図 8 と図 9 は調査を開始した 1998 年に確認した調査日毎のシロハラとツグミの生息数です。シロハラは集団で飛来して同じエリアで分散しながら生息するようではぼ山なりの増減傾向がありますが、ツグミは集団で飛来するが後は急に少なくなる傾向があります。他の地区に行くのかどうか詳しいことは分っていません。



### (3) シロハラの山くんだり、ツグミの里住い

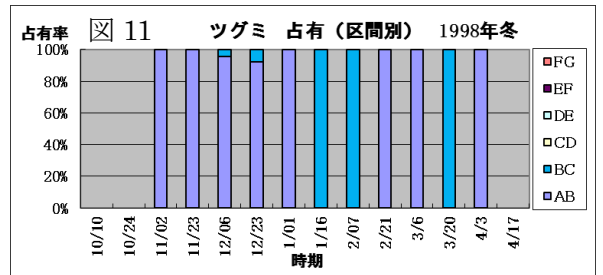
冒頭の「物の怪」の場所は霜降山の標高 200m 付近です。調査した 10 年間でほぼ毎年最初に声を聞くのはその付近でした。

図 10 に区間別の占有率をグラフで示していますが、シロハラが 10 月下旬に初来したときは、その 6~8 割が DE~EF 区間の標高 200m 付近に来ており、たんぼのある AB 区間（持世寺~駐車場付近）にはいません。ところが、12 月ごろになると山頂付近から BC~CD 区間の中腹へ下がり、そして 2 月下旬~3 月上旬ごろには、標高 20m 付近の AB 区間（持世寺~駐車場付近）のいわゆる里山風景の区域に下がってきます。年により 7~10 割が里に下がり、山頂付近はいなくなります。



このようにシロハラは山頂付近から里へと段々と下ってきます。シロハラの山くんだりです。山頂付近の餌を食べ尽くし、餌を求めて次第に里に下がるのでしょう。

シロハラに対してツグミは、図 11 に示すように来たときの場所の多くは AB 区間（持世寺~駐車場付近）の低地です。その後は生息数が少なくなり、見かけるのはほとんど AB 区間の里で、林の中で見かけるのはごくわずかです。習性がかかなり違うようです。



### (4) シロハラのかくれんぼ、ツグミのきょっつけい

年が明けて山中を歩いていると、地表付近でガサゴソと音がします。見るとシロハラが嘴で落葉を掻き分けて餌を探しています。3 月になると里の田圃の水路に溜っている落葉の下に頭を突っ込み、時には身体ごと落葉に埋まり一生懸命に餌を探しています。そんな時ソーと近づいて水路の真上から見ていると、ヒョイと頭を上げたシロハラがこちらに気づきあわてて「クチチッ」と鳴きながら飛び出していきます（ビックリさせてごめんなさい）。10 月に来た頃は「物の怪」のように警戒しているのに、3 月には無警戒で全く脇目も振らず餌探しです。警戒心が薄れているためかタカ類に捕食されたあとのシロハラの羽のかたまりを地面によく見かけるようになります。



それに対してツグミは林ではやや開けたところで、時に姿を見たり鳴声を聞く事はありますが、地表でガサゴソと餌探しをしている姿はみかけません。ところが 2 月ともなると我家近くの田圃の中で、あちこちツグミを見かけるようになります。山の中で見るより個体数が多くなっているのどこに隠れていたのかと不思議です。採食の様子もシロハラのように脇目もふらずではなく、数歩急ぎ足で歩いては立ち止まり、姿勢を正し（きょっつけい）遠くを見てはサッと地表の餌をついばみ、またしばらくきょっつけいをして遠くを見ています。その姿にいつも孤高な精神を感じあこがれるのであります。

(5) シロハラのキョロン、ツグミのクー

3月も下旬になる頃の朝、布団の中で目が覚めかける時分に外から「キョロン、キョロン」と澄んだ声が聞こえてきます。起き上がって窓越しに見ると、庭の柿木にシロハラがとまり囀っています。そして4月の月上旬頃まで柿木にとまって私が朝食を済ますまで「キョロン、キョロン」と囀ります。

忘年会で鳥仲間が歌った「カンツォーネ」のように声量がありのびやかです。10月に来た時のおどおどした様子から、堂々とした大歌手への様変わりです。

ツグミも我家の庭にその頃やってきます。柿木にもとまりますが、しばらく遠くを見ていて一声「クー」と鳴いて飛立ちます。孤高な姿勢は崩しません。

霜降山で長いお付き合いを通じてどちらも好きな鳥です。

.....



シロハラとツグミの冬季の様子を紹介しましたが、冬鳥も種によって様々な生活様式があるようです。ジョウビタキやルリビタキなどはテリトリーを確保して冬場の餌を確保します。

また留鳥のシジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、コゲラそれにメジロのカラ類は冬季には10~20羽程度の集団（カラ類の混群といいます）になって採食行動をします。集団の方が餌も見つけやすく、また外敵にも早く気付くことができます。冬の野鳥たちを見ていると厳しい冬を生き抜くための智慧に感心させられます。

5 厚東川の冬鳥

冬の霜降山の野鳥は他の季節より生息数が多いと紹介しましたが、河川の野鳥も冬季はカモたちで賑やかです。

次は河川の冬鳥の様子を宇部市の西部を南北に流れる厚東川の汽水域（図12）の野鳥について紹介します。

汽水域に位置する沖ノ且橋～県道190号線の厚東川大橋の間約2300mは川幅が150m~300m程度あり、また、葦の洲もあります。カモたちにとって人などの外敵との距離が保て、また休む場所になります。冬には餌となるアオサなどの藻があり格好の居場所です。

2012年3月~2013年2月までの1年間調査した時の様子を紹介しましょう。

図12 厚東川 河口・汽水域付近



## (1) カモ類の出現種の年間変化

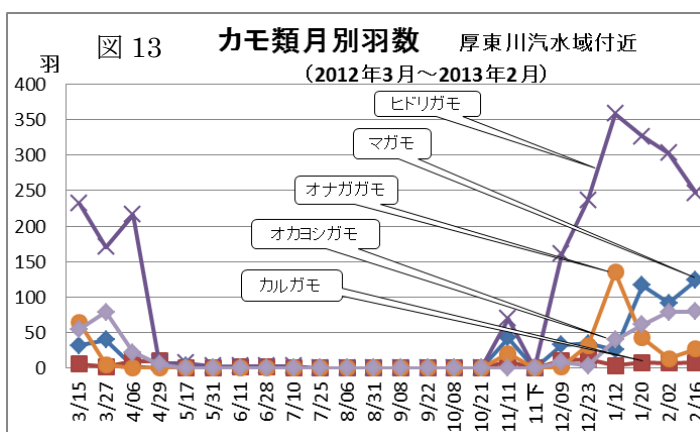
図 13 にカモ類の月別羽数を示しています。

厚東川汽水域のカモ類は 11 月前半に飛来し、年末にかけて徐々に数が増え、1 月上旬ごろに最大数となります。そして 2 月頃から徐々に数が減り、4 月下旬ごろほぼ北帰行が終了します。この調査の年には、傷ついたり飛べないカモが 4 月下旬以降 6 羽いましたが 6 月・7 月の洪水で流されたようで居なくなりました。

場所が池であれば流されることはなく、秋にまた仲間と再会ができたであろうと思うのですが、野鳥にとって飛べなくなることは厳しい現実さらされることを思い知らされます。人も得意とするところがなくなれば、職場でも家庭でも疎んじられるようになりますので同じですが・・・。

宇部市の河川や湖沼にやってくるカモは以前は常盤湖が一番多かったのですが、2009 年（H21）年 2 月 9 日に常盤湖で飼育されていたコクチョウの 1 羽が死亡する事態（簡易検査で鳥インフルエンザ陽性の疑い）が発生し、その日のうちに周辺の飼育鳥などへの感染防止のために同湖で飼育されていた白鳥類 322 羽、ガン類 14 羽、ペリカン 2 羽の殺処分が決定され、子供たちから餌をもらっていた白鳥類はいなくなりました。1957 年（S32）オランダの動物園から 20 羽の白鳥が宇部市にやってきて、わが町を明るくしようとの関係者の想いに応じてきた白鳥たちの子孫は 52 年で絶やされました。

それ以降、常盤湖のカモ類は激減し、宇部市におけるカモ類の生息は汽水域を含む厚東川河口付近が一番多くなっています。



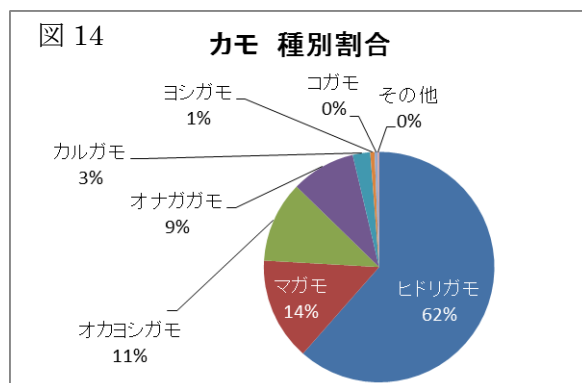
## (2) カモの種別割合

さて、厚東川の汽水域にやって来るカモの種類とその割合（図 14）を見てみましょう。

カモの種別割合ではヒドリガモが約 6 割を占め、次いでマガモ、オカヨシガモ、オナガガモがそれぞれ 1 割前後を占めています。

留鳥として 1 年中日本にいるカモがいます。皇居の堀で繁殖し、道路を横断するニュースでご存知の方も多いたと思いますがその名はカルガモです。調査区域では留鳥のカルガモの割合はわずか 3%です。カモの殆どがシベリア方面から冬鳥としてやってきます。

潮が引きだして汽水域に川底の砂地が現れ出すとカモたちは食事の時間です。カモは種によって潜って採餌できるカモ（海ガモ）と水面採餌や首を水中に突っ込み尻を川面に出す逆立ち採餌する潜れないカモ（淡水ガモ）



がいますが、汽水域に来るカモはほとんどが潜れないカモです。

川底に殖えているアオサなどに水中に伸ばした嘴が届くようになると食事時間になるわけです。川面に尻を出して尻尾をフリフリしながら採餌している様はほのぼのとして笑いを誘います。

腹が満ちてくると川面や葦洲で嘴を羽根に入れて寝ます。時々、目の瞬膜を開いてあたりを警戒します。

小春日和の時などはゆっくりとした穏やかな風景です。

### (3) カモの恋

冬にやって来るカモ類のオスは鮮やかな色合いをしていますが晩夏～初冬に日本に来た当座はメスと同じような色彩（エクリップス）で地味です。メスはどの種も薄茶色なので種を見極めるのは大変ですが、来た当初はオスもメスと同じような色彩をしていますので識別するのが難しくなります。ベテランも春以来カモを見ていないので最初は識別に迷うことがあります。

目が慣れてくると種の模様や形などの小さな特徴で種の識別ができるようになります。また、オスも12月頃には鮮やかな色彩になり識別が容易になってきます。

観察しているとカモが入り乱れて採餌しているようでも同じ種がグループで右に行ったり、左に行ったりしていますので、雄が識別できると一緒に行動するメスが他の種のメスと識別できるようになります。

雄の羽が鮮やかな色彩になって来ると、時折、オスがメスに寄り添うように泳いだり、オスが別のオスをバタバタと羽ばたきながら水面を追っかける様子を見受けるようになります。

カモにとって恋の季節到来です。メスに自分の美しい羽をアピールしたり、同じメスに思いを寄せる他のオスを追払ったりしています。

2月頃になるとカップルで水面をゆっくりおよいだり餌を啄んだりしていますが、中にはメス1羽にオス2羽が右へ左へと一緒に泳ぎ、まだ決着のついていないところもあります。



マガモ♂



オカヨシガモ♂



オナガガモ♂



ヒドリガモ 右が♂、左が♀



オシドリ 右が♂、左が♀

図 15 はミコアイサのディスプレイ（求愛行動）です。目の周りの白黒模様がパンダに似ているのでパンダアイサとも呼ばれています。（このスケッチは探鳥会用に資料として作っていたのですが、開催予定の12日前に阪神大震災があり、当時、探鳥会も含めあらゆる行事ができなくなりました。）

ミコアイサは宇部市にも常盤湖に10数羽やって来てバードウォッチャーを魅了します。

ツルやタカなどの大型野鳥の番は一生連れ添うそうですが小型の野鳥やカモ類は毎年、番のオスメスが変わります。「鴛鴦の契り」と例えられるオシドリもそうです。

外敵に襲われやすい小型の野鳥にとっては種の保存に必須の智慧なのでしょう。

北帰行する3月頃にはほぼカップルができているようです。カモ類は北方の短い夏でも帰着後すぐに繁殖できるように越冬地でカップルになっていると思われます。

山辺や川辺の鳥たちの冬の様子の一部を紹介しましたが、激寒の中でも遺伝子に蓄積された智慧を働かせながら一生懸命に生きています。

## 6 野鳥観察の好時期

野鳥観察は春・夏・秋・冬いつでもできますが、多くの野鳥を落ち着いてゆっくり見られるのは冬です。

霜降山では冬季に野鳥の種類も多くなり、また、その羽数も多くなっています。さらに山の木々も落葉しており、枝々にとまる野鳥が見えやすくなっています。

河川もカモなどの野鳥が多く飛来しており、山野の鳥と同様に冬季が賑やかです。

初心者には観察に最適の時期です。私も初めてバードウォッチングに参加したのは1月15日で、広島市の太田川の川面や岸辺でカイツブリやカワセミなど29種を見ることができました。こんなに鳥がいるのかとビックリしたのが最初です。

次は最終回となります。「春の野鳥」と題して、新しい芽生えとなる春にちなみ「種の継続」について紹介したいと思います。（写真提供 鳥友：塩見和彦氏）

図 15 ミコアイサのディスプレイ（求愛行動）

{宝塚市 武庫川 探鳥会 (H7.1.29) 資料 後方の山は甲山}

